



元日本経済新聞論説委員 小林省太さん執筆

プロジェクトを記録した本、ついに出版!

現役記者時代を含め10年間名取に通い、海岸林にまつわる思い出やその役割、震災後の再生に至った経緯やこれまでの道のりなどについて、市民や行政、オイスカなどへ繰り返し取材をしてまとめた記録。林業の専門用語が並ぶいわゆる技術書ではなく、海岸林の再生に携わる人々の揺れ動く心情を綴るヒューマンドキュメント。



四六判上製
本文224頁+巻頭カラー8頁
定価1,300円+税
発売元 愛育出版



PR動画
YouTubeからご覧ください

大学時代にインターン生としてプロジェクトに参加し、現在は社会人となりました。上京してから宮城県から遠く離れたのに、近頃は海岸林に想いを馳せる事が多いのです。そんな折にこの本を読むと、まるで故郷からの手紙のようでした。災害が起これば、都市機能は停止し、人々は耐え忍ぶ毎日を過ごす事になります。現在は世界中の人々が目に見えないモノと戦う日々を過ごしています。こんな時だからこそ、大切な物を失くしても未来の為に逃げずに戦い続ける勇気を教えてくれるのが「海岸林再生プロジェクト」です。

(2017年度インターン 内川 裕稀)

改めて海岸に松の大切さ、そして地域の方々の松への関わりの大変さが強く感じられました。

自分としてもこのボランティアに参加した事で少しは貢献できたのかと思うと達成感に満足している所です。今迄も松の成長に感動し、来年は、そして10年、30年、いや100年後は、と考えると自分の人生も楽しくなり、欲がでて、20年先30年先まで松と関わりを持ちたい気持ちになります。企業や組合、個人でプロジェクトに協力された全国の皆さんもそう願っているのではないでしょうか。

今迄ボランティアに参加された方、そして新たに参加される方も特に若い人達に協力を願い、立派な、そして震災後の海岸林として日本一と評価される事を願っております。

また、小林さんには、これからも松の成長を追いかけ、第2刊、3刊と海岸林の経過を残していただきますようお願いいたします。

2021年コロナに負けず、マツに負けず、みんなで頑張りましょう

最後に私の拙い昨年秋の一句

「100年後 大樹を夢みる 新松子(ちぢり)」

(ボランティア 名取市在住 大槻 壽夫)

地元やオイスカの皆さんの海岸林再生プロジェクトに対する思いや葛藤、プロジェクト開始前や初期の壁など、今まで知らなかった背景や苦勞を皆さんの生の声や著者小林さんの外からの視点を通して知ることができました。

また、この壮大なプロジェクトに出会い、微力ではありますが関わる事ができていることは本当に貴重な経験だと改めて感じます。震災で海岸林を失うのは一瞬のことでしたが、その復興・再生には今後何十年という長い月日が必要です。2021年で震災から10年となり、人々の記憶・関心が風化しつつありますが、この書籍が、その時代を生きていく私たちのような多くの若い世代がこの長期的プロジェクトに関心を持ち、参加するきっかけになればと思います。

(ボランティア 東北大学 法学部3年 菅野 航)

- 記録という名の使命 -

熱い思いを胸に事を起こせば、行動が先行して事績を跡付けることに疎くなる。しかし誰かがその歩みを記さなければならない。それが後生への最大の遺産となる。東日本大震災から十年目を迎えるこの節目の時に、海岸林再生の記録の書として『松がつなくあした』(小林省太)が上梓されたことを、多くの人たちが喜んでのことだろう。もちろん私もその中の一人である。

名取北高の校木〈クロマツ〉の意味を、この書から改めて教えられたように思う。生徒たちのボランティア活動が地下水脈となって、いのちをつなぐ活動となることを微力ながら支えたいと思っています。すばらしい本をありがとう。

(宮城県名取北高等学校 校長 挽地 裕之)



<お詫び>初版部数が少ないこともあり、全国の書店店頭には並んでいません。書店に足を運んでくださったみなさまにはご迷惑をお掛けして申し訳ありませんでした。お求めいただく場合は、書店で取り寄せ、または紀伊國屋、楽天などの書籍通販サイトでご注文をお願いします。



「名取発、世界へ!!」



みなさまへ

元日本経済新聞論説委員の小林省太様の著書「松がつなぐあした」を読むことで、これまでを振り返りました。ありのままの事実を書いていたことを心から光栄に思うがゆえ、恥ずかしながら、何日もページを開くことができませんでした。読む前から宝に思えて仕方なかったのです。著者ご本人からは、「吉田君、『はじめに』と、『おわりに』だけじゃなく、ちゃんと読んでくれたの?」と言われる始末でした。いつかコロナ禍を振り返る時が来たら、出版準備の助手として奮闘する本部スタッフの姿と、文字通りの資料の山も目に浮かぶと思います。

本の帯の「未完」という言葉が象徴する通り、我々には10年ということに達成感も感慨もあまりなく、通過点としか思っておりません。小林さんが多くの登場人物を紹介することで表現されたように、私たちに足りないところを応援して下さる方が次々に現れ、いつの間にか年輪のように太くなっていった感覚と、常に賑やかだった思い出だけが刻まれています。当プロジェクトホームページの「活動報告」欄にも掲載している、3年前からの「よみがえれ! 海岸林」の連載を読むたびに必ず涙が滲んだのも、周りに恵まれたという実感からだと思います。

若いころから、何のためにオイスカが存在するのか考え続けていました。今もまだ明確な答えは出ていませんが、このプロジェクトにおいて目標を多くの人と共有し、地元以外の力も結集させる役割は果たせたとはいふしています。それはオイスカの歴史の積み重ねがあったがゆえであり、目に見えない重みがあったからこそだと感じています。長年にわたり陰で現場を支えて下さるみなさまをはじめ、オイスカの支部やスタッフの存在はその最たるものです。折にふれて活動報告会を企画し、寄附金募集のチラシを配り、広報活動してくれる姿が立ち上げ直後から始まり、今に至るまで続いています。聴講者4万人、241回に及んだ活動報告会はオイスカの総合力そのものです。

私は在職23年になりますが、世界に多くの現場

を抱え、結果で勝負していることを理由にオイスカという職場を選びました。そして、支援者増強、資金獲得業務を通じて、助けが必要な世界の現場に日本の力を結集させる仕事に誇りを持っています。また、タイやフィリピンの大規模植林の現場を目標と考え、外国人の大先輩を師匠と仰ぎ、海外の同僚たちとも励まし合い、刺激し合った日々がなかったら、震災2日後に海岸林再生の直感と、その後の仕事の構想は生まれなかったと思います。

2018年12月、「10年経つまでは海外出張しない」という計画を前倒しし、2021年からの次期10年を自分なりに考えるために、まずタイに行きました。その後、コロナ以前にフィリピン、ミャンマーに滑り込み、それぞれ2週間、10数年ぶりに長逗留しました。何より感じたのは、温暖化の影響と災害の百貨店のような様。それと、各現場の実行力の向上でした。いま、その経験を活かし、SDGsを念頭にオイスカの次期10ヵ年計画を立案する作業チームに加わっています。計画発表は今年10月の創立60周年式典でと考えています。そもそもNGOという存在は会員からの会費収入と寄附収入が中心で、安定性に欠けるゆえ長期計画を立てづらく、公益法人は収支相償という原則もあり、企業や行政などとは単純に比較できない独特の運営の難しさがあります。とは言え、社会から必要とされる存在であり続け、最強の海岸防災林を目指して取り組むとともに、この経験を将来の世界のために活かすことを約束します。オイスカだからできる仕事があるのは確実。「名取発、世界へ!!」という気持ちで努力します。

オイスカの輪をもっと大きくするために最後にお願ひがあります。まず、「松がつなぐあした」が一人でも多くの方、そして若い世代に読み継がれるには、全国のみなさまの力が必要です。また、海岸林再生プロジェクトへの最後のご寄附のみならず、「オイスカ会員」となっただけ、SDGs達成に向けて、共に歩いていきたいと願っています。以上、国内外のオイスカスタッフを代表して心よりお願い申し上げます。

海岸林再生プロジェクト担当部長 吉田俊通